出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり

第2回　こだわりだから仕方ない？

佐藤比呂二

さとう　ひろじ／東京都生まれ。特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ―自閉症児を育む実践』（全障研出版部）など。

行った道でしか帰らない

シュン君（知的障害、自閉症、中3）には、「行った道でしか帰らない」というこだわりがあります。行きとちがう道で帰ろうと言われるとたちまちパニックになり頭を叩く自傷が始まることもありました。

社会見学で訪れたある博物館でのことです。入口付近に2階に上がるエスカレーターがあり、シュン君は入館するやいなやそのエスカレーターで2階へとダッシュで上っていきました。

私は思わず心の中で（しまった！）と叫びました。なぜなら、そのエスカレーターは上りだけで隣に下りがついてなかったからです。

「行った道でしか帰らない」シュン君。案の定、1階に戻るために上ってきたエスカレーターで降りようと試みます。

しかし、階段を降りても降りてもエスカレーターは上ってしまい前に進みません。けげんな表情を浮かべるシュン君に「あっちの階段で降りようか。エレベーターもあるよ。1階のレストランには大好きなトンカツが待ってるから」と声をかけましたが言うことを聞いてくれません。どうしても来た道で帰りたいのです。私はシュン君の気持ちを切り替えさせることができず、最後は仕方なく警備員に頼んでエスカレーターを止めてもらったのでした。

シュン君のこうしたこだわりや切り替えのむずかしさは「自閉症だから仕方ないこと」なのでしょうか。

楽しみなプールが中止になっちゃった

夏のある日、朝から雨が降り続いていました。体育はプールの予定でしたが、屋外プールだったこともあり残念ながら中止の判断です。

ところが、シュン君がプールバッグを大事そうに抱えてスクールバスから降りてきたのです。私は（あちゃ～！　これは大変な一日になるぞ）と覚悟しました。というのも、シュン君はプールが大好き。誰よりも早く水着に着替え、朝の会から水着姿で準備万端なのです。そんなシュン君がプールに入れないとわかったら、まちがいなくパニックになり授業どころではなくなるだろうと思いました。しばし悩んだ末、（それならば、いっそのこと内緒でプールに入っちゃえ！）と腹をくくり「一緒にプール入ろうね」と声をかけました。

その一言で、シュン君は玄関から教室にダッシュ。普段は放り投げてしまうカバンからしっかり連絡帳を出し、掃除用具入れにも登らず自分の席に着いて朝の会を待っていました。

クラスでは、プールの代わりにホットケーキづくりにとりくみました。シュン君は大好きな目玉焼きも自分でつくりうれしそうでした。活動が一段落した頃合いをみて、私は意を決してシュン君をプールに誘いました。

すると、まったく予想外のことが起きたのです。シュン君は私の手を取ると、プールではなく体育館へと走っていったのです。そして、「ふん！　ふん！」と指さしで（トランポリンを出して！）と一生懸命合図するのです。

（えっ！　なんでプールじゃないの？）と疑問に思いながら、言われたとおりトランポリンを用意すると笑顔で跳び始めました。そして、その後、プールへの要求は一切ないまま下校していったのです。

プールに入らず、しかも、パニックにならずに帰るなんて考えてもみませんでした。なにより、朝からプールを楽しみにしていたはずなのに、なぜ誘われても行かなかったんだろう？　なぜトランポリンにしたんだろう？　まるで狐につままれたようでした。

ホントのねがいは「こだわらない自分」

シュン君が帰ってから一日の記憶を朝から辿ってみました。そして、私は「もしかしたら…」とひとつの考えが思い浮かびました。

それは、シュン君は今日のプールは中止だとわかっていたんじゃないかということです。ただ、わかっているけど入りたいし、もし、入れないと言われたら泣いてしまっただろうと思います。けれど、先生は「入ろう」と言ってくれた。それはシュン君にとって、格別にうれしいことだったのではないでしょうか。いつもは放り投げるカバンからちゃんと連絡帳を出し、高いところにも登らず自分の席に着いて待つという明らかにいつもとちがう行動をとったのは、（中止のはずのプールに入れるならちゃんとやるよ）という意味があったのではないかと思い当たりました。

しかし、大好きな調理で気持ちが満たされたら、誘われているのにプールでなくトランポリンを選んだのです。まるで（先生、プールじゃなくてトランポリンでいいよ）とでも言うように。

それは、「中止なのにプールに入る自分」ではなく、「入りたいけど、プール中止を受け入れられる自分」を選んだ姿だ